

●「赤心」継かん

Dream

# 五代塾 Sinbun (新聞)

Godaijuku

## 第30号

発行：Dream 五代塾

吹田市千里山西 5-14-17

発行責任者：理事長 川口 建



旧集成館反射炉跡

### 島津重豪・島津斉彬・鍋島閑叟・五代友厚

科学評論家である筑波常治は五代友厚が島津斉彬の本当の後継者であったと高く評価した。開明派の名君と謳われた島津重豪・島津斉彬・鍋島閑叟の開明的政策を比較しながら、筑波が島津斉彬の本当の後継者が五代友厚であると記した根拠を探ってみた。

## 薩摩藩・開明派の系譜

Dream 五代塾顧問 上村 修三

(五代友厚顕彰会世話人)

筑波常治著「島津七〇〇年」

『目で見る日本史「翔べが如く」と西郷隆盛』

1989年より

西郷隆盛も大久保利通ももちろん後継者にかぞえられる。だがここではもうひとりの人物に注目しよう。五代友厚である。斉彬の側近のひとり、科学事業に関係した。それをつづじて西洋の文化にふれ、薩摩藩の若手のうちもっとも開明的な思想を持った。斉彬の死後の薩摩藩に反動期がきて、攘夷思想が滲透しかけたときも、彼の信念はうごかなかつた。ひそかに単独で上海まで密航し、大型の軍艦を買いいれてきたりした。文久三年(一八六三年)に薩英戦争がおこる。その結果、攘夷の時代おくれが人々に認識された。それとともに五代友厚の出番がきた。

かれは久光を説得しヨーロッパへの留学生派遣を実現させる。そして自分も団長となつてイギリスにゆき、政府首脳と直談判のあけく、かれらの政策を薩摩藩有利に転換させた。活躍の舞台が国際的であり、世界的な見とおしのひろさは、同時代の坂本竜馬をしのいだ。しかも明治維新ののちの五代友厚は、薩摩藩士の意識からあつさり脱却した。かれは大阪において実業家となり、この町の近代的商都へ発展させる功勞者になった。

斉彬のほんとうの後継者は、久光や西郷や大久保もさることながら、五代友厚こそもっとも心ざわしいのではないか。斉彬の精神を極

限までですめると、島津とか薩摩とかいう枠をこえることになる。五代友厚はそれをなしとげた。逆説的に考えるところ、名君の系譜の総決算といえまいか。

(注)「自分も団長となつて・・・」と表現されているが、団長(使節団長)を務めたのは大目付新納中三(こころちゆうぞう)である。

### 開明派名君・島津重豪と島津斉彬

重豪・斉彬の西洋文化への関心、近代的な政策(殖産、教育、医学、出版)、徳川幕府対策などをまとめると図表1となる。

【図表1】

	島津重豪 (しげひで) 1745 - 1883 (8代藩主)	島津斉彬 (なりあきら) 1809 - 1858 (11代藩主)
島津氏	島津家25代	島津家28代(重豪の曾孫)
西洋文化への関心	オランダ語・中国語を習得 歴代長崎オランダ商館長と交流 1826年にシーボルトと会見	曾祖父重豪の感化により西洋文化に傾倒、オランダ語を学ぶ 重豪等と18歳でシーボルトと面会
殖産の近代化	佐多旧薬園設置し、医学振興を試みた	反射炉・溶鋳炉・蒸気船建設 近代様式工場群「集成館」設立 薩摩切子製造奨励
教育・医学	藩校「造士館」・医学院設立 天文観測所「明時館(天文館)」、 薬園創設	ガス灯、写真技術(銀板写真)研究、 蒸気機関研究
編集事業	農業辞書『成形図説』 『鳥名便覧』『質問本草』 『琉球産物誌』『島津国史』 中国語辞書『南山俗語考』	『遠西奇器述』『航海金針』 『四書集註』『五経』『古文孝経』 『散花小言』『施治攬要』 鉛活製作を木村嘉平に命令
徳川幕府対策	第11代徳川家斉の正室(御台所)・ 広大院の父(家斉の岳父)	養女篤姫(天璋院)を13代将軍・ 徳川家定の御台所とした

■造士館：1773年、重豪により開設。当初は「学問所」として設立された。江戸・昌平を模範として漢学を中心に和学や習字を教えたが、斉彬時代になると、国字や洋学も取り入れられるようになった。斉彬は、学問本来の目的を見失っていると嘆き、「十か条の訓諭」によって学問のあるべき姿を示し、造士館の振興を図るも、1877年の西南戦争で焼失。隣接地には演武館や医学院も併設された。

■集成館：1851年より始まった島津斉彬による近代的な西洋式工場群。斉彬は、海外の脅威に対抗するため、海防の強化と産業の育成を目指し、桜島を望む島津家別邸・仙巖園の隣接地に集成館を建設。ここで、造船、造砲、金銀分析、硫酸など化学薬品製造、ガラス製造、紡績、写真、電信等の近代的な事業が展開された。鉄製大砲鑄造では、オランダの技術書を参考に、外国人技術者の指導なしに反射炉を建設した。初期には大砲や洋式軍艦の製造に重きが置かれ、最初に反射炉・溶鋳炉が建設され、その後、硝子工場や鍛冶場が建設された。1863年7月の薩英戦争で工場群は焼失。薩英戦争後、仮工場が建設されて事業を再開したが、これを機に経済基盤となる産業育成も視野に入れられるようになった。1865年、石造の機械工場、1867年に鹿兒島紡績所が建設された。

重豪・斉彬は西洋の科学技術や文化に並外れた関心を持ち、「蘭癖(らんべき)大名」と呼ばれた。斉彬は、幼少期から重豪に可愛がられ、その影響で若い頃から、蘭学者たちと親交を深めて西洋の情報、

書物を熱心に収集した。重豪は晩年にシーボルトに面会したが、斉彬は、重豪に従って18歳でシーボルトに面会している。藩の近代化を推進すべく、重豪は藩校「造士館」、演武館、医学院を設立し、斉彬は「集成館」を設けて藩の軍事・工業の近代化に貢献した。天文・科学分野では、重豪は天文観測所「明時館(天文館)」を創設。斉彬は日本初の反射炉や蒸気船の建造、ガス灯、写真技術(銀板写真)の研究に着手した。

1857年に撮影に成功し、9月に鹿児島で撮影された銀板写真(島津斉彬像)は、現存している。

二人とも藩内にとどまらず、幕府要職者や他藩の有力大名と深く関わるなど広範な人脈と幕政への影響力を有していた。重豪は、將軍徳川家斉の正室(広大院)を娘に持つ「將軍の義父」として、幕府に絶大な影響力を持っていた。斉彬は、老中阿部正弘や松平慶永(春嶽)らと結び、幕政改革や將軍継嗣問題(斉彬が篤姫を養女として13代將軍家定に嫁がせて一橋慶喜の推挙)に深く関与した。

藩政については、二人とも大規模な事業を推進したため、藩財政に多大な影響を与え、それが原因となって家督相続を巡る混乱(お由羅騒動など)の背景となってしまう。

重豪は、積極的な文化事業により藩の財政を窮乏させたが、調所広郷(ずしよひろさ)を改革主任に任命し、調所による抜本的な財政改革によって、改革十年余で、国元に50万両余が蓄財された。



斉彬公銀板写真(複製)



「鉛製鑄造活字」(複製)

斉彬は、父・斉興が財政難の苦勞しているのを経験していたため、家督譲渡を拒み続け、斉彬が藩主になったのは40代を過ぎてからであった。調所による砂糖の専売制強化、密貿易の公認・拡大(唐物貿易)、支出削減などで劇的に藩財政を改善、財政再建成功で蓄財した資金により反射炉建設や集成館事業を支えた。この藩の近代化成功により産み出されたヒト・モノ・カネが明治維新をリードしていくこととなった。ヒトであれば、大久保、西郷、五代であった。なお、調所は斉彬の世継ぎ問題で対立し、最終的に服毒自殺することになった。

佐賀藩主鍋島閑叟(直正)の近代化施策

鍋島閑叟(1814-1871)は、佐賀藩の近代化、藩改革の取り組みは図表2のとおりである。

歴史学者・芳即正は、重豪・斉彬を「鎖国日本のなか迫りくる欧米の脅威をはらいのけ、日本の独立をまもろうと懸命に生きた開明派大名斉彬の生涯をみると、これら同時代人の評はかならずしも見当ちがいはない。日本列島の最南端にある辺境の地薩摩に、はやく重豪の手で種をまかれた開花の芽、それは一時のあだ花におわるかと思われたものの、曾孫斉彬のときに見事に花ひらき、ついに明治維新という形で大きな実を結んだ」と評した。



斉彬から従兄弟 10 代佐賀藩主鍋島直正へ送られた手紙。薩摩藩品を贈られた直正が返礼として佐賀藩品と塩馬を贈ったことに対し、斉彬がお礼を述べている

五代は、官を辞して、十日戎で賑わう今宮戎神社真南にあった紀の庄別邸(九里正三郎所有、正三郎の息子とも甥ともいわれるのが後の五代龍作である)を買収して、金銀分析所を開設した。この金銀分析所では、日本在来の金貨・銀貨を購入し、それらを精錬して金銀地金にして造幣寮(現造幣局)に納入して莫大な利益を得た。この資金を元手にして五代は鉱山業に着手していった。五代の金銀分析所、鉱山開発技術は、斉彬の集成館で創成された技術を継承していると思われるので、重豪・斉彬の遺業が五代に引き継がれたといっても過言でもあるまい、と思う。

【図表2】

産業・技術の近代化	社会・制度の改革
日本初の反射炉建設：1850年に完成させ、歴代日本初の鉄製大砲の製造に成功	財政改革：破綻寸前だった藩財政を、磁器(有田焼)の専売制強化などで立て直した
国産蒸気船建造：藩独自の理化学研究所である「精煉方(せいれんかた)」設置 1865年、日本初の蒸気船「凌風丸(りょうふうまる)」を完成させた	教育：藩校弘道館を拡張し、身分を問わず有能な人材を登用する教育改革を行った 文武課業法を制定し勉学を奨励、田中久重(東芝の祖)等の才能ある技術者発掘・登用
アームストロング砲導入：当時最新鋭の兵器をいち早く導入し、佐賀藩を幕末最強の軍勢力を誇る藩に変貌させた	医学の近代化：医学寮を設置し、世襲制だった医者免許を制度化。種痘(天然痘の予防接種)を日本でいち早く導入し、自らの子にも受けさせることで普及を図った
特産品：磁器・茶・石炭などの産業育成	理化学研究所「精煉方」、海軍伝習機関「三重津海軍所」を設置。英学を学ぶための藩校「致遠館(ちえんかん)」を長崎に設置、副島種臣と大隈重信もこの藩校で学んだ

## 曾祖父 曾野作太郎は 五代友厚と会っていたか

Dream 五代塾顧問 曾野 豪夫

### 曾祖父曾野作太郎(隠居名嘉兵衛)

これまで外曾祖父永見米吉郎を中心に五代友厚との関連について書いてきたが、本稿では筆者の曾祖父曾野作太郎(隠居名嘉兵衛)について触れておきたい。初登場である。曾祖父が生まれたのは、大坂の大塩



曾野嘉兵衛(初代作太郎) 明治44年逝去の1週間前

平八郎の乱の翌年の天保九年(一八三八年)のことで、江戸時代の四大飢饉、即ち寛永、享保、天明に続く天保の大飢饉(一八三五〜一八三九年)の真つ最中であつた。五代友厚が鹿児島で生まれた三年後のことである。曾祖父の生家は兵庫県の丹波水上郡の山奥(と子供頃は思っていたが現在は丹波市春日町)の代々庄屋の上田家の分家に生まれた。庄屋の一族といえども飢饉で国中の人々と等しく疲弊しきつていった。(筆者は昭和八年一九三三年生まれなので、その一〇〇年前のこと)に少し関心を有している)



丹波の上田本家 左大木の後ろが曾祖父の家

作太郎は幼くして大決心をした。満一〇歳の時(一八四八年)、両親や本家と相談して京に上り商業で身を立てることにしたのである。妹はいたが一人息子である。ある冬の朝まだけ、お握りと僅かばかりの衣類を背負って

両親等に見送られて一〇〇km余りの山道を京に向かつて上った。その時の心境は周防の積月性(げつしよ)の漢詩の通りではなかったかと思う。目的は「学」ではなく「商」だった。 「人間到る処青山有り」

### 都での修行と独立

作太郎は京で両替商・古金銀売買商に丁稚として入店し、ひたすら主命を重んじて奉公し刻苦精励して番頭になっていた三十歳の時に明治維新に遭遇した。幕末以来の混乱で業績は不振で、京も寂れてきた上に主は老齢となり引退して閉店をすることとなった。



京都近年の四条大橋  
右側が南座、突き進むと八坂神社  
左側の建物の向う側が富永町界隈

そこで作太郎は、又々大決心をして店主の営業権を買取り、八坂神社の近くの八坂新地富永町(四条大橋の東北側)で、主の恩を生涯忘れないようにするために主の出身地の地名から屋号を近江屋として自立することにした。私の父の名前は近一。明治三年の「護証」によると三十五百両(円)である。大金である。(左肩に別の筆跡で八年に司法省判事の官位氏名が記されているが、意味がよく分からない)明治四年「新貨条例」により通貨の単位が「両」から「円」に改められたので両は円と読めばよい。尚、この書類では曾祖父作太郎は近江屋作太郎となっている。覚書を今回読み返してみても、一昨年急逝された当塾八木孝昌顧問に伺っておくべきだったと悔やんでいる。

### 明治維新直後の経済混乱期

幕末期の露欧米の来航の混乱期を経ての波乱の明治維新だった。京都では皇室一家が東京に奠都され、文武百官が都を捨てて東京に移ったのですっかり寂れてしまった。

作太郎は明治二年、京の大手縮緬(ちりめん)問屋柴田商店の娘多免(ため)と結婚した。本家は近江長濱の大手縮緬製造・販売業の柴田家である。本家の当主は七代目彌七で、一〇年長濱に第二十一国立銀行を設立して初代頭取に就任した。滋賀銀行の源流の一つである。外曾祖父永見米吉郎の兄傳三郎(五代烈頭の友)も同年に長崎で第十八国立銀行を設立している。遠いが父方と母方それぞれに銀行創業家がいる。

五代は同二年に官を辞し、政府から在官中の功勞に対して晒布二匹と金七五〇両を賜った。そして秋に大阪に金銀分析所を設立した。翌三年正月に大和の儒家萱野常次の三女豊子と結婚した。(後年、萱野家と大阪永見家とは親戚関係となり、今もお付き合いをしている)そして五代は全国から江戸時代の旧貨を集めて大阪の造幣寮(局)に独占的に売り込んで莫大な利益を上げて、鉱山業へと発展していった。

### 金銀売買業

作太郎も漬し金銀の売買を行って相当な利を挙げた、と明治四十四年発行の『兵庫県人物史』に書いてある。作太郎は、買い付けた漬し金銀等を京都から三十石の高瀬舟に載せて伏見經由で大阪に運んだのだろう。大阪での売り先は造幣寮か五代の金銀分析所しかない。もし造幣局に当時の買入原簿が残っていたら曾野の名前がなければ五代の分析所が買い付けたことになる。五代は大手納入業者である曾祖父と会っていたのだろうか。五代の長崎以来の部下である私の外曾祖父永見米吉郎はどうだったろうか。私は会っていたと思う。

欧州では明治三、四年の普仏戦争は終息したがその後の世界経済は混乱し、日本も幕末以来の欧米への輸出蚕卵紙が大暴落して不況に陥った。五年横浜港でマリヤ・ルース号事件

が起こり、新政府は急遽「芸妓解放令」(人身売買禁止令)を出した。それは経済金融の変動に脆弱な国内の景気に悪影響を与え、作太郎の取引先やその先で連鎖倒産する者が続出した。作太郎も四五、〇〇〇円の負債を負って蹉跌した。八坂富永町の店舗兼居宅は処分し、四条京極で露店を張って漬し金銀の売買を続けて糊口を凌いだこともあった。ある時、妻の着物や小物類を売って三両の金子で弗相場を試みたら運よく一〇〇両(円)の利益を得た。そこで、七年寺町四條下ル(藤井大丸の南)に店舗を構えた。私の祖母は九年、そこで生まれた。



祖母が生まれた京の店舗兼居宅  
長男正照と。奥行き深い家だ  
った。昭和53年(1978)

### 株式仲買人となる

そこそこ潤沢な資金を保有した作太郎は七年初めて株券、公債の仲買を開始し、時世の進歩と共に事業は順調に発達して「巨万の富」を得た。(前掲書) その頃、京都株式取引所設立の議が起り作太郎は田中源太郎(略歴未記)、内貴甚三郎(京都財界人、京都市長、政治家)等と共に積極的に設立に協力した。しかし学なき身故か絶対に設立に協力した。しかし役には名前を出さなかった。郷里の他、京都の多くの神社仏閣への寄付者としての名前は今も多く見ることが出来る。(清水寺、東寺、北野神社、本能寺、平安神宮等)

『京都取引所五十年史』(昭和一〇年)に、明治期の株式「仲買人売買高上位者」のリストがある。末期十四年間の内九回がトップで、曾野作太郎が如何に有力仲買人

期 間	株式仲買人 売買高順位
曾野作太郎 (初代) 明治31~37年 (7年間 (毎半年毎))	1位 12回
	2位 2回
曾野作太郎 (2代目) 明治38~44年 (7年間 (1年間毎))	1位 3回
	2位 3回
	3位 3回
	4位 1回

だったかが分かる。

二代目作太郎(次女の婿)は岳父の遺言に背いて衆望(もた)し難く、京證理事長を大正九年から昭和十七年迄二十二年間務めた。(私の父はその翌年戦死した。)

私の祖母は姉嬢だったが自分の婿養子となる人が株屋を継ぐことを嫌い、普通の養子をとって分家した。昭和七年私の両親が結婚する時、母方永見家を取り寄せた帝国信用興信所の結婚調書によると、祖母が明治三十一年に分家して結婚する時の分与財産は「世評六十七万円」と言われた、と書いてある。(子孫に継承されなかった理由を誰も詳しく教えられなかった)

### 田中源太郎

京都の五代友厚と言われた田中源太郎が、明治四十四年に満七十四歳で逝去した曾祖父曾野嘉兵衛(初代作太郎)の葬儀委員長を務めて下さった。同氏は、京都銀行の前身亀岡銀行、京都株式取引所、京都電燈株式会社、京都鉄道株式会社等の設立者で、京都府会議員、衆議院議員、貴族院多額納税者議員なども務めた。実際に設立に関わったとされる事業は三〇を超えると言われた。

### 曾祖父の遺言

私と妹は大東亜戦争中の昭和二〇年六月から鳥取県の山奥の山寺に集団疎開し、敗戦後の一〇月に帰宅した。昭和五十六年、私は曾祖父の葬儀の折に京都の菩提寺の小僧をしていた老僧に会った。「嘉兵衛さんの葬儀は会葬者は二〇〇〇人と大変な盛儀でした。引き出物は虎屋の羊羹でしたな。私は嘉兵衛さん、貴方のお爺さん、お父さんとも親しくさせて貰っていました。豪夫さんで直系四代の曾野さんにお目にかかれて嬉しく真途に往かせて頂きます。」

祖母(作太郎の長女)は「刀脇差金銀漬し物

### Dream 五代塾活動状況

昨年12月の定例Dream五代塾セミナーは休講し、京都嵐山一泊研修を実施した。

一日目は16時現地集合。懇親会の前1時間半座学研修。Dream五代塾顧問の上村修三氏の講義。

テーマ：「直木三十五と五代友厚」。

直木三十五は明治24年(1891)

2月12日大阪市南区内安堂寺町に父惣八、母しずの長男として生まれる。

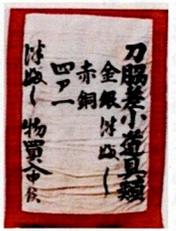
本名は植村宗一。桃園尋常小学校、育英高等小学校、市岡中学を経て早稲田大学に進学。しかし学費滞納で放校処分になる。美術誌の記者、翻訳・出版事業等を行い、関東大震災を機に大阪へ戻り、プラトン社で編集者兼作家として活躍を始めた。また、筆名「直木三十五」の由来は「本名植村の植を二分して直木、この時三十一歳になりし故直木三十一と称す」。年を重ねる毎に三十一、三十



直木三十五 Wikipediaより



曾野近一 お喰いぞめ 曾野嘉兵衛宅 西側  
明治32年(1899)京都市役所の西側



「買入申候」と書かれた「幡(はた)」、暖簾、屋号や名前を染め抜いた大風呂敷、還暦祝い品、戦争中に供出した残りの丁銀、藩札、その他嘉兵衛の遺品を柳行李に一杯貰った。翌年正月二日にその後の戦後の不自由な生活を知ることなく安らかに永眠した。

以上



三、...とした。直木のアイディアのようだ。直木は小説家、脚本家、映画監督などの分野で活躍し、特に大衆・時代小説のジャンルを確立し、直木賞の母体ともなる作家である。五代友厚に関しても『夕刊大阪』に昭和7年(1934)1月~5月に『五代友厚』を連載。前年同紙に連載していた『大阪物語』の続編という形で書いた。(昭和9年発行の直木三十五全集6巻に集録。16年博文館文庫で刊行されている) 尚、小説として五代を取り上げるのは直木三十五が最初ではないか。

直木は五代友厚像を、①「一事業を成し遂げて財と成すよりも、次々と新たな大事業をなすことを目指した」②「一人一業主義で事業を完成させるのではなく、仕事をしている事が面白くて、その仕事の結果如何を省みない人である」と評している。そして本書の中では、①「人の人生を論じる場合に、その人が、そのしていた事業を完成し、これによって財を貯めたか、貯めぬかということを標準にしてはならない」②「孔子が、治国平天下の道を説いて、征東の野に漂泊して死んでしまっても、誰も、これを嗤われないと同じように、先駆者とその後に、財がなかったからといって、冷評すべきではない」と記している。また、官有物払い下げ事件について、当時の国会開設派であった板垣退助、大隈重信らの批判の強敵として、政治利用されたことと理解している。

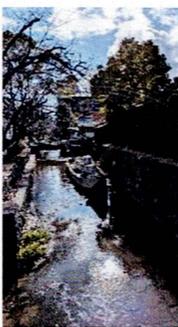
二日目は京都市内、出町柳・高瀬川沿いに『幕末維新の志士達を偲ぶ町歩き』。

最初は豪商三井家下鴨別邸(重要文化財)を見学し、寺町通りを南下。途中、新島襄旧邸を道路から見学し通り過ぎ、左折し鴨川方面に歩くと、まもなく木戸孝允邸宅跡、舎密局跡、旧藤田伝三郎男爵別邸夷川邸がある。木戸

孝允旧邸は木戸が病氣療養中に明治天皇が見舞い来たことを記した天皇行幸碑がある。



木戸孝允邸宅跡 2020年筆者写す



往來と同時に、各藩の幕末維新の志士達もこの高瀬川を

次は美しい流れの高瀬川沿いを歩く。最初に目に付くのが「高瀬川一之船入」の場所である。船入とは荷物の積み下ろしや方向転換を行う場所である。内陸の二条付近までの物資輸送手段としての高瀬川は、都の経済に重要な役割を果たした。高瀬川は1614年頃、豪商・角倉了以父子が開削した。水源は鴨川の水を取入れ、川の長さは約11kmに及び、川幅は8m(現在は目測半分位か?)。たくさんの高瀬川の往來と同時に、各藩の幕末維新の志士達もこの高瀬川を

積荷と一緒に利用していたかも知れない。しかし鉄道など近代化の中で衰退し、船運の使用は大正末期で終わり廃止された。現在は清らかな水や桜・柳が美しく、情緒溢れる景観として市民や観光客を楽しませている。

この高瀬川沿いには、山形有朋別邸をはじめ、佐久間象山・大村益次郎遭難の碑、加賀藩邸跡、佐久間象山寓居跡、桂小五郎寓居跡、武市瑞山寓居の跡碑、吉村虎太郎寓居跡、池田屋騒動之社、等々と続く。昼食後は希望者のみで三条で鴨川を渡り更に南下、清水寺まで足を延ばす。毎年恒例となつた今年(2025年)の漢字一字「熊」を拝観。帰途は人混みを避けた清水寺成就院で月照信海南上人遺蹟碑と遭遇。月照はこの寺の住職で尊王攘夷に傾倒し「安政の大獄」で西郷隆盛と共に鹿兒島錦江湾に入水、一人果てた月照及び弟信海辞世の句碑、西郷の月照へ



中：月照辞世の句  
左：信海辞世の句  
右：月照17回忌  
西郷の弔詩「月照墓前」漢詩

#### 月照墓前の作 西郷隆盛(訳詩)

『相約し淵に投じて後先無し  
豈囃らんや波上再生の縁  
頭を回せば十有余年の夢  
空しく幽明を隔てて墓前に哭す』

の弔詩碑(漢詩)を観ることができた。今回の高瀬川沿いを中心とした街歩きは、京都のほんの一部であるが、諸藩の屋敷跡や幕末維新の志士達の活動・生活の史蹟見ることによって多くの志士達が駆け巡っていた情景が十分に想像できる。重厚で奥の深い歴史が詰まった魅力ある街であると改めて感じた。(川口)

#### お知らせ

◆第25回五代塾セミナー予定

日時：2026年2月21日(土) 14時~16時(原則偶数月第3土曜日)

- ・テーマ：五代友厚小伝・第11話「小松帯刀の死と政局の動き」
- ・場所：川口宅 事前申し込み制
- ・会費：1000円

#### 2026年度Dream五代塾会員募集

- ①年会費：2,500円  
(2026年度年会費対象期間：1月~12月)
- ②振込先：郵便局・ゆうちょ銀行  
◆口座記号番号：00920-4-198557  
◆加入者名：川口建  
会員希望の方は2026年2月末までに振込頂ければ幸いです。

★編集後記はお休みします

(連絡先：川口建)  
・Email: gogoken12345@gmail.com  
・Tel: 080-4497-5688  
・HP: <https://www.dream-godai.com>

